# おばあちゃんのやしの実

福江中　三年　河合　風南

「名も知らぬ　遠き島より　流れよる　やしの実ひとつ」

これは、明治三十一年、民俗学者の柳田國男が、私が住んでいる田原市の恋路ヶ浜で拾ったやしの実の話を、親友の島崎藤村に話して生まれた詩です。夕方になると、市内に流れる防災無線でこの曲が流れます。曲が流れるたびに、私も何気なく口ずさんでいたので、知っていました。

「風南ちゃん、おばあちゃんのやしの実が届いたよ。おばあちゃんを、伊良湖に招待してくれるだって。びっくりだね。おばあちゃんのやしの実を拾ってくれたのは、どんな人かなあ？」

ある日、九十五歳の大祖母から、電話がかかってきました。

田原市の観光ビューローでは、やしの実の詩の再現を目指して、「名も知らぬ遠き島」を沖縄県の石垣島と見立てて、毎年約百個近くのやしの実を石垣島沖から流しています。今年で三十一回目を迎える、田原市の伝統的な行事になっています。毎年、やしの実の持ち主になってくれる、やしの実会員を募ります。大祖母も、やしの実会員になっていたのです。

大祖母が買ったやしの実が、どこかの誰かに拾われ、拾った人がそれを持ち主に返還するというイベントに、招待されたというのです。私はとても驚きました。

「やしの実って、本当に流れ着くんだ。」

私の母は市役所の職員で、「やしの実流し」のイベントが始まったときから、携わっていました。母は、私が小さい頃から、私の名前でやしの実会員に応募していました。でも、やしの実は、一度も拾われたことはありませんでした。

大祖母のやしの実が、どこかの海岸に流れ着いたという報告を聞いて、何故遠く離れた石垣島から、ここ伊良湖岬に流れ着いたのだろうという、大きな疑問が湧いてきました。私は、その理由を調べてみることにしました。

日本列島の太平洋側には、黒潮という海流が流れています。この黒潮という海流は、北太平洋を時計回りに回る暖流の一部で、偏西風の影響を受けて、